駿府と今川氏

第13回

臨済寺の創建と太原崇孚（たいげんそうふ）

氏輝の菩提寺として建立された臨済寺

その頃は、戦国大名クラスともなると、死ぬと菩提寺が一寺建立されるのが常識であった。今川氏のような大きな大名となると、重臣でも菩提寺が建立されている例もある。

天文五年（一五三六）三月十七日に死んだ氏輝の菩提寺として、家督を継いだ義元によって建てられたのが臨済寺であった。その寺の名は、氏輝の法名「臨済寺殿用山恵玄居士」に因っている。

場所は、家督を継ぐ前の梅岳承芳（ばいがくしょうほう）、すなわち義元がいた善得院のところで、その住持として迎えられたのが太原崇孚（たいげんそうふ）、すなわち雪斎（せっさい）であった。

それまで、雪斎は善得寺にいたが、義元が家督を継いだことで、自分の養育係を近くに呼び寄せた形となる。つまり、義元はただ雪斎を兄氏輝の菩提寺の住持に迎えたのではなく、自分の諮問に答えてもらうため、補佐役として招いたことがわかる。

臨済寺と駿府今川館は、直線距離にして約二キロメートルほどで、義元が雪斎のもとを訪ねるにしても、雪斎が義元のもとを訪ねるにしても無理のない距離であった。

軍師と言われた雪斎の手腕

雪斎のことを義元の執権と評することもあり、また軍師と呼ばれることもある。それは、今川氏の力が三河にまで伸びていったとき、三河支配に雪斎が関与していたことを示す文書が多数残されていることと、実際の三河攻めの戦いにおいて、雪斎が大将となって自ら大軍を率いて出陣しているからである。

天文十八年（一五四九）の三河安祥城の戦いのとき、雪斎が大将となっているが、雪斎は「敵の大将織田信広を生け捕りにせよ」と命じている。織田信秀の子信広を生け捕りにして、当時、信秀のもとに人質として捕えられていた松平竹千代を取り戻すためであった。そして、それを成功させている。

また、有名な「甲相駿三国同盟」をプロデュースしたのも雪斎である。当時、二国間の近国同盟は普通に見られたが、甲斐の武田信玄、相模の北条氏康、そして駿河の今川義元という三者を同盟させた手腕は特筆されるものがある。

では、禅僧の雪斎が軍師になることができたのはなぜなのだろうか。

私は、雪斎が義元を連れて京都の建仁寺、妙心寺で修行していたときに身に付けたものと見ている。京都の大きな寺には『孫子』や『三略』などの兵法書があったのであろう。

▲静岡市葵区大岩に建つ臨済寺　撮影：水野　茂